

1. 動機

以前、2年間ポーランドに滞在していた。その間、ポーランド国内の十近くの町と、他のヨーロッパの国々のいくつかの町を旅した。

旅をしながら、私はあることに気がついた。町に行くと、私は高いところに引き寄せられてしまうのだ。旧市庁舎や教会の塔や高いビル、丘など、その街が広く見渡せそうな場所を見つけると、私はのぼっていく。

多くの場合、エレベーターなどはなく、階段をのぼり続けたり、長い坂道をのぼっていくことになる。それでも高い場所を目指す。そのとき、私はその場所からどんな景色が見えるかを具体的に思い描いたりすることはあまりない。階段や坂をのぼっている私の中には、「これから見渡すこと」への期待しかない。

のぼりつめ、街を見るとときには、なるべく360度の角度から見たいと思う。もちろんその場所の問題で、ある角度からしか街が見えないこともある。しかしそのときでも、まず私は見える景色全体を見渡す。建物の形や色、街の向こうに見える街、海、耕地などを見、走っていく車や電車に目をとめる。気に入った場所で、条件が許せば、1～2時間はそこに居る。条件というのは、建物が何時まで開いているか、その場所が寒すぎたり暑すぎたりしないかなどだが、人の混み具合もその条件に入ると思う。私は以前にベルリンを訪れたことがあるが、また街を見渡したいと思って、このシンポジウムの際にテレビ塔にのぼろうと思った。が、のぼるためのチケットを買うために人が長い列をつくっていたので、やめてしまった。この場合は、のぼる前に、もう諦めてしまった例と言える。

ただ街を見ていると、私の心は穏やかになる。私は、ことばではない何かで、街と話しているような気がする。私にとって、高いところから街を見渡すことは、その街との一種の出会いなのではないかと思う。「一種の」と言うのは、例えば新しい街に鉄道で着いて、駅や人々の様子を見たり、店の人やその街で会った人と話をすることも、旅行者が経験する、新しい町との「出会い」と言えると思うからである。

2. 1. 街を見渡している「私」は孤独

私の動機をもとにしたディスカッションでは、「出会い」というのは人とするものだ、という意見をいただいた。また、宇宙から地球を見て「神の気分だ」と言った宇宙飛行士のように、地上を支配するというか、自分のものにしたいというような気持ちがあるのではないかという意見もあったが、私の気持ちは、見渡している街を自分のものにしたいという衝動ではなく、やはり、街そのもの、街全体に出会いたい、という気持ちである。「出会う」ということばは、人に対してのみ使うとは限らないと思う。ここに関しては、「街に出会う」という表現が、街を擬人化した詩的な表現だという意見ももらった。私が「出会う」ということばを使った感覚は、この意見に近いと思う。街はモノではなく、私と交流する可能性を持つ、生きたものなのである。「出会う」ということばを使ったために、ディスカッションのメンバーの方々には、私の伝えたいことと異なるイメージを持たれたのだと思う。

さらに、高いところから街を見渡しているというのは、とても孤独だという意見もいただいた。人や様々なものが入り混じってゴチャゴチャとしている嫌なものから離れて、孤独

になるというのである。

ある人は、山腹に家が並んでいるような山を見ていると涙が出てくることがあると発言した。そこに自分の知らない生活があると思うと涙が出てくる。そういったことはやはり、「私」が独りで見ているものの外側にいるからなのではないか、ということだった。

私は動機を書いたとき、自分の心が穏やかになり、新しい街と自分が混ざり合っていくような感覚を伝えたいと思っていたように思うが、ディスカッションで、私の感情への意見ではなく、街を見渡しているときの「私」が、他人からどのように映るのか、という意見が出てきたことは、予想外だった。

しかし確かに、誰かと一緒に旅をして高いところへ行ったとしても、私は黙って街を見続けることが多い。街を見渡すということは、私にとって個人的な行為なのだということに思い至った。

ディスカッションでは、外側から何かを見るようにすることによって、その何かと接触することを避けているのではないか、旅に出て(意識的にか無意識的にかはわからないが)クネクネ道を避けて、高いところを目指しているのではないか、つまり、高いところのぼるというのは逃避なのではないか、という意見もいただいた。

意見を聞いてすぐには、私はそれを否定しなくなった。私が嫌なものや面倒なものから逃げようとする、弱った人間のように言われたような気がしたからである。

しかしながら、実は、私のそういった面は否めないと思う。高いところへ行くと、地上(日常とか生活とか言ってもいいかも知れない)の、たくさんのノイズから離れることが出来るからである。しかし、私は街のクネクネ道を歩くし、街を歩いていろいろな刺激を受けるのも大好きである。

2.2. 「私」は高いところで何をするのか

高いところから街を見渡すことを個人的なことだと考えて、では、私はそこで何をしたいのだろうか。

これについて、町を見渡して、私は自分と出会い、自分を見つめ、私の「真(芯?)」に近づくのではないか、という意見があった。

ディスカッションではこのことについて深く話せなかったが、もしこの意見が、自分と向き合い、自分のしていることや、いつもは気がつかなかった自分に気づき、それに思いをめぐらせるということなら、私が高いところで穏やかな気持ちになっているとき、そのようなことはしていないと思う。思いをめぐらすというのは、ことばを自分の中で次々と作り出している状態だと思うが、高いところで街を見渡しているときに私が求めるのは、その反対のことで、思いをめぐらせることや物事を見極めようとする意識から自由になることだと思う。空気のようにそこにいることを楽しむのである。

逃避については2.1.でも触れたが、このような意識は、逃避だと考えられてしまう可能性がある。

インタビューで話をしてくださった方は、私のことを評して、五感の中の「視覚」でいろいろなものを捉えようとする「視覚人間」なのではないか、とおっしゃった。「視覚人間」というのは、私の物事の捉え方を示す一つの表現だと思った。確かに、私は他人に自分の伝えたいことを話すときには、図解をしたり、頭の中に映像を思い浮かべたりする。人に会っ

たときには、その人がどんな人なのかを「見よう」とする。見ながら何かを発見できることは、私にとって生活の喜びになっている部分も大きいと思う。しかし、見続けていると、だんだんとストレスがたまっていく。そのストレスから逃げるために高いところにのぼるのだと言ってしまえば、これは逃避である。

しかし私は、高いところから街を見渡すことを、ネガティブな意味を持つ「逃避」ということばでひと括りにしたくない。優秀なスポーツ選手であっても、スポーツをずっとし続けるわけにはいかない。筋肉をスポーツではないことに使う時間も必要である。私は自分を優秀だとは思わないが、言語を研究して、それを文章化することや日本語教育の現場に活かすことは、とてもやりがいがあることだと思っている。しかし、いくら喜びややりがいを感じていても、それをし続けることには限界があると思っている。

街を見渡すときには、私の前には街が「いる」。大きい街でも小さい街でも、私を含むことができる街が、私の前に広がっている。私は高いところから街を見渡し、街からことばではないメッセージを受け取り続ける。そのときには、「この街は だ」といった言語化はしない。高いところから街を見渡すということは、言語化、つまりカタチにするという行為から離れてみるということなのだと思う。

3 . 結論

旅をして新しい街と出会うということが、このレポートの動機のもちだった。インタビュー、ディスカッションをするうちに、街を見渡すことの私にとっての意味は、街と出会うというところにはないことに気がついた。

高いところで私がしていることは、何かを絶えずつくり出す行為から離れて、カタチにならない、いろいろなものが混ざり合っている中で、自由になることなのだと思う。だから私は、そこで穏やかな気持ちになれるのだと思う。私はこの行為に「逃避」という名前をつけたくない。逃避とは、本来はしなくてはならないことを放棄してしまうという意味だと思うが、私にとって高いところから街を見渡すことは、当然必要なことだと思っている。

もしかしたらこのことは、旅や休暇の意味と関係してくるかも知れない。そのことについては、ここでは深く考えないことにした。

私にとって高いところから街を見渡すことは、自由になることだと思う。